

オルガン制作者の言葉

豪華な彫刻や潇洒な装飾などで威厳を誇示しようとする、些か野暮ったい外見を持つこのパイプオルガンは、先ず良い音がすること、誰にでも使い易く、その力を礼拝の中で最大に発揮出来る事をコンセプトとし、私達の工房のチーム全員に依って制作されました。

この楽器は主に、各56鍵を持つ二段の手鍵盤、30鍵の足鍵盤とで演奏される、合計870本から成る14種類のパイプ群と、これに風を供給する送風機構、これらをコントロールして発音・止音させる数々のメカニズムと、楽器を保護し音響上の意義を持つ、堅牢な柵のケースなどから成り立ちます。

第一鍵盤は飽く迄も輝かしく力強い、最もオルガンらしい基本的な響き「ブレヌム」を構成する、錫含有率80%のプリンシパル管を中心とし、更に強力なトランペットを配して、会衆の讃美を十二分に支えます。

これとは対比的に、繊細な性格を持つフルート管で、5個の自然倍音を整然と間断なく配列した第2鍵盤は、最も個性的な音色を持つクロモルヌの存在と相俟って、時に静かで瞑想的な祈りの伴奏を、時には叙情的に旋律を歌い上げます。猶このパイプ群はロマン派のオルガンには頻繁に見られるスウェルシャッター（錠戸）の中にあります、容易に即座にその音量を加減出来るメリットを採り入れたもので、ロマン派音楽の演奏を目論んだ訳ではありません。

最低音域でオルガンの響き全体を支える足鍵盤は、所謂縁の下の力持ちでそのストップ数は僅か2個ですが、他の手鍵盤を繋ぐ事が出来るので、実は最強のパワーを有しているのです。

パイプオルガンは教会堂の飾り物或いはステイタスシンボルでは無く、その存在理由の第一義は「礼拝とその音楽の為の道具」であり、適正な使用と保守管理に依って、人間や建物に比べ数倍もの寿命を持ちます。どうかこの私達の作品を、教会内のみに止まらず、この地域の財産として、教会音楽を中心とした芸術や文化発信の道具として末永く「酷使」して戴ければ、これこそがオルガン造り冥利に尽きるという事です。

最後に、この2年懸りのプロジェクトに対し、多大な信頼を寄せて下さった西千葉教会の皆さまに、心より深く感謝申し上げます。

株式会社 マナ オルゲルバウ 代表取締役 松崎讓二



西千葉教会オルガン仕様

I. Manual Hauptwerk C-g^m 56鍵

1. Prinzipal	8'
2. Rohrflöte	8'
3. Oktave	4'
4. Oktave	2'
5. Mixtur III-IV	1 1/3'
6. Trompete	8'

II. Manual Brustwerk C-g^m 56鍵

[スウェルシャッター付]

7. Gedackt	8'
8. Gemshorn	4'
9. Nasat	2 2/3'
10. Waldflöte	2'
11. Terz	1 3/5'
12. Cromorne	8'

-Tremulant-

Pedal C-f 30鍵

13. Subbass	16'
14. Gedacktbass	8'

ストップ数	14
パイプ総数	870
カブラー	II/I, I/P, II/P
アクション	メカニカルキーアクション メカニカルストップアクション



西千葉教会オルガン

制作 マナ オルゲルバウ
完成 2006年6月6日

日本キリスト教団 西千葉教会

〒260-0044 千葉市中央区松波2-7-3

TEL.043-251-6016

<http://church.jp/nishichiba/>

この贈物に感謝して

牧師 木下 宣世

私が西千葉教会の招聘を受けて赴任してきたのは1988年4月でした。思い起こしますとその頃既にパイプオルガンの導入はオルガニストたちの共通の願いとなっていました。しかし当時はまだ夢の段階であったと思います。

そのような長年の夢がかなってこの度パイプオルガンを設置することができたことは私たちの教会にとって大きな喜びであります。

もちろんここに至るまでにはパイプオルガンを入れるかどうかの議論もなされました。経済的な備えやオルガンビルダーの選定のための過程もありました。それらの全てを導いて実現に至らせてくださったのは神さまであります。このオルガンは西千葉教会に与えられた神さまからの賜物です。そう信じ、私たちは心から神さまに感謝する次第です。

私たちはパイプオルガンを導入するに際し、これを主として礼拝における伴奏楽器として位置づけました。即ち礼拝の中でなされる会衆賛美を支え、力強いものとし、それによって私たちのささげる礼拝を一層豊かなものにするための楽器と考えました。

ですからこのオルガンの伴奏によって私たちは心を高く上げ、声高らかに神を賛美したいと願っています。私たちの賛美が神さまの喜び給うものとなるならまことに幸いです。

私たちはこのパイプオルガンを私たちのためだけに用いてはならないと思います。神さまからの恵みをできるだけ他の諸教会とも分かち合いたいと願っています。具体的には分区や支区及び教区の諸集会、また市内の超教派の集い等で用いて頂きたいと思います。このオルガンが他教会のためにも役立つものとなることが私たちの願いです。

終わりにこのパイプオルガンを製作してくださったマナ オルゲルバウに対して心から御礼申し上げます。私たちの様々な願いや注文を忍耐強く聞いてくださり、立派なオルガンを完成していただきました。私たちの思いを越えた見事な出来栄に私たちの心は感謝に満たされております。どうもありがとうございました。

オルガン設置までの歩み

パイプオルガンの設置は、奏楽奉仕者が長く抱き続けてきた夢でした。2000年1月、使用していた電子オルガン更新の必要が役員会の話題になり、パイプオルガン設置を検討するオルガン委員会が組織されました。夢がにわかに現実の課題となったのです。

検討はパイプオルガンについて何も分からない状態からの出発でした。オルガン積立金の到達見込み額は1000万円でした。委員会内には小規模でもパイプオルガンを望む声と、それなら電子オルガンが良いと考える声が平行しました。国内のオルガンビルダーに意見を求める調査も行ってみました。

検討開始から2年を経た2002年1月、役員会に「12ストップ程度のオルガンを設置したい。費用は2500万円を要する。」との報告が提出されました。多額の費用がかかるこの報告に、役員会内で反対の声が出たのは当然のことでした。しかし役員会は創立100周年記念事業の一つとして、オルガン委員会の報告にそってパイプオルガンを設置することを決定しました。オルガン積立金に記念事業資金を加え、特別献金を募って費用を整えることとしたのです。

オルガン委員会はビルダー選定の作業に入り、意見の交換を重ねました。続けてきた見学会から得た情報の分析や、教会としての設置条件の整理も行われました。検討の結果ビルダー3社を選定し、設置案の提出を要請しました。その中から教会の希望する条件に最も適合するものとして、マナ オルゲルバウの提案を受け入れることとなり、2004年7月1日に契約を締結する運びとなったのです。

数年を要すると想定した特別献金は、1年を待たずに目標額に達しました。2006年6月6日にオルガンが引き渡されました。いくつもの山を越えての夢の実現でした。御国に在る先輩方の祈りがあり、役員会を始め教会全体の理解と協力があり、あらゆる問題に粘り強く取り組んだオルガン委員の努力がありました。そしてそれらすべてを用いて最善に導いてくださったのは神様でした。

(オルガン委員会委員長 木下 勝世)



完成引渡し式を終えて

搬入から組立て完成まで



礼拝堂に搬入された部品



ペダルチェストの組立て



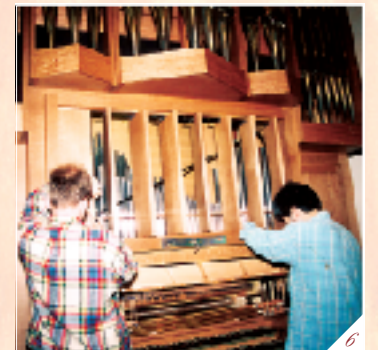
第一鍵盤用トラッカーの調整



オルガン内部の組立て



プロソペクトパイプの組込



スウェルシャッターの調整



組立て完成(スタッフの皆さん)

